

Kay チュートリアル

開発環境の準備

下記のものをインストールします。

- Python-2.5
- App Engine SDK/Python
- Kay Framework
- ipython (推奨)

macports の python25 を使うばあいは、他に下記もインストールしましょう。 Kay のリポジトリバージョンを使うには mercurial も必要です。

- py25-hashlib
- py25-socket-ssl
- py25-pil
- py25-ipython (推奨)
- mercurial

mercurial を使用して、Kayのソースコードを下記のようにして clone できます。

```
$ hg clone https://kay-framework.googlecode.com/hg/ kay
```

リリースバージョンを使う場合は <http://code.google.com/p/kay-framework/downloads/list> から最新版をダウンロードして下記のように解凍します。

```
$ tar zxvf kay-VERSION.tar.gz
```

Note

このチュートリアルでは Kay-0.10.0相当のバージョンを使用します。 Kay-0.10.0 が既にリリースされていればそちらのリリースバージョンを、 まだリリースされてなければリポジトリの最新版を使用してください。

もし zip 版の appengine SDK をインストールした場合は、下記のようにシンボリックリンクを作ってください。 appengine の SDK をインストーラーを使用してインストールした場合には、この作業は必要ありません。

```
$ sudo ln -s /some/where/google_appengine /usr/local/google_appengine
```

クイックスタート

プロジェクトの開始

新しいプロジェクトを始めるには、kay の manage.py スクリプトでプロジェクトディレクトリの雛型を作成します。今後、プロジェクトの管理を行うには、プロジェクトディレクトリ内で manage.py スクリプトを使用する事になります。

```
$ python kay/manage.py startproject myproject
$ tree myproject
myproject
|-- app.yaml
|-- kay -> /Users/tmatsuo/work/tmp/kay/kay
|-- manage.py -> /Users/tmatsuo/work/tmp/kay/manage.py
|-- settings.py
\-- urls.py

1 directory, 4 files
```

シンボリックリンクをサポートしているプラットフォームでは kay ディレクトリと manage.py へのシンボリックリンクが作成されます。後で kay の場所を動かすと動かなくなりますが、そんな時はリンクを張り直してください。

アプリケーションを作る

Kay では、プロジェクト内にアプリケーションと呼ぶディレクトリを作成しそこにプログラムを書くことになります。

出来たばかりの myproject ディレクトリに cd して、早速アプリケーションを作りましょう。下記の例では myapp というアプリケーションを作成しています。

```
$ cd myproject
$ python manage.py startapp myapp
$ tree myapp
myapp
|-- __init__.py
|-- models.py
|-- templates
|   \-- index.html
|-- urls.py
\-- views.py

1 directory, 5 files
```

アプリケーションが出来たら settings.py を編集して、プロジェクトに登録する必要があります。

まずは settings.py の INSTALLED_APPS に myapp を追加します。必要なら APP_MOUNT_POINTS を設定してどの url で動かすか設定する事もできます。下記の例では、アプリケーションをルート URL にマウントする例です。

APP_MOUNT_POINTS を設定しない場合は /myapp というようにアプリケーション名 URL にマウントされます。なお、ここでは認証用のアプリケーションである kay.auth も一緒に登録しています。

settings.py

```
#$/usr/bin/python
#..
#..

INSTALLED_APPS = (
    'kay.auth',
    'myapp',
)

APP_MOUNT_POINTS = {
    'myapp': '/',
}
```

ご覧になれば分かると思いますが INSTALLED_APPS はタプルで APP_MOUNT_POINTS は dict になっています。

アプリケーションを動かす

作ったアプリケーションを動かしてみましょう。下記のコマンドで開発サーバ が起動する筈です。

```
$ python manage.py runserver
INFO      2009-08-04 05:48:21,339 appengine_rpc.py:157] Server: appengine.google.com
...
...
INFO      ... Running application myproject on port 8080: http://localhost:8080
```

この状態で <http://localhost:8080/> にアクセスすると、「Hello」と表示される筈です。この文字列は、アプリケーションを作成した時に作られた view に より表示されています。

GAE にアップロードする

実際にコードを見る前に、GAE にアップロードしてみましょう。GAE にアップロードするには、あなたが持っている appid を app.yaml の application に設定してから、下記のコマンドを使用します。

```
$ python manage.py appcfg update
```

google アカountのユーザー名とパスワードを聞かれる場合は、自分の情報を 入力します。成功すると、<http://your-appid.appspot.com/> でアプリケーションにアクセスできるようになります。

デフォルトアプリケーション

ここで、少しデフォルトのアプリケーションを見てみましょう。

myapp/urls.py

まずは urls.py です。このファイルでは、url と view の対応を定義します。

```
from kay.routing import (
    ViewGroup, Rule
)

view_groups = [
    ViewGroup(
        Rule('/', endpoint='index', view='myapp.views.index'),
```

```
)  
]
```

Rule の行で '/' -> 'myapp.views.index' という対応づけをしています。

myapp/views.py

次に views.py です。アプリケーション内の views.py には、所謂ビジネスロジックを書きます。

```
# -*- coding: utf-8 -*-  
"""  
myapp.views  
"""  
  
"""  
import logging  
  
from google.appengine.api import users  
from google.appengine.api import memcache  
from werkzeug import (  
    unescape, redirect, Response,  
)  
from werkzeug.exceptions import (  
    NotFound, MethodNotAllowed, BadRequest  
)  
  
from kay.utils import (  
    render_to_response, reverse,  
    get_by_key_name_or_404, get_by_id_or_404,  
    to_utc, to_local_timezone, url_for, raise_on_dev  
)  
from kay.i18n import gettext as _  
from kay.auth.decorators import login_required  
  
"""  
  
from kay.utils import render_to_response  
  
# Create your views here.  
  
def index(request):  
    return render_to_response('myapp/index.html', {'message': 'Hello'})
```

ファイルの始めの方には、コメントとして良く使うであろう import 文が書いてありますので、必要に応じてコピーして使えます。モジュール本体には、関数が一つ定義されています。

Kay では基本的に、関数を定義する事でビジネスロジックを書きます。実は関数では無くても、callable であればなんでも構わないのですが、始めのうちは関数を使っていきましょう。

index(request):

view 関数は必ず request オブジェクトを第一引数として受け取ります。設定によっては、追加でキーワード引数を受け取るようにもできますが、この index() は request のみです。

view 関数は Response オブジェクトを返す必要があります。ここでは html テンプレートを使用して Response を生成するための関数 render_to_response を使っています。

render_to_response には、テンプレートの名前と、テンプレート内で 使用する値を辞書として渡す 事ができます。

myapp/templates/index.html

最後に template を見てみます。

```
<!DOCTYPE HTML PUBLIC "-//W3C//DTD HTML 4.01 Transitional//EN" "http://www.w3.org/TR/html4/loose.dtd">
<html>
<head>
<meta http-equiv="Content-Type" content="text/html; charset=UTF-8">
<title>Top Page - myapp</title>
</head>
<body>
{{ message }}
</body>
</html>
```

Kay で使用している template engine は jinja2 です。当面二つの事を覚えて おきましょう。

- ・ view から渡された値を表示するには `{{ }}` で囲んで変数や関数呼び出し を記述します。
- ・ 制御構造や jinja2 に対する命令は `{% %}` 形式のタグで記述します。こ の形式で記述するのは if..e lse や for 文などの制御構造および、テンプレー トの継承を意味する extends 文などです。

制御構造の使用例をひとつあげておきます。

```
<!DOCTYPE HTML PUBLIC "-//W3C//DTD HTML 4.01 Transitional//EN" "http://www.w3.org/TR/html4/loose.dtd">
<html>
<head>
<meta http-equiv="Content-Type" content="text/html; charset=UTF-8">
<title>Top Page - myapp</title>
</head>
<body>
{% if message %}
  <div id="message">
    {{ message }}
  </div>
{% endif %}
</body>
</html>
```

この例では、message の表示部分を html の div で囲んでいます。さらに jinja2 の `{% if %}` を使用して、 message に有意な値が入っている時のみ div を表示するようにしています。

当面はこれら二つの記法について覚えておいてください。

ユーザー認証

ユーザー認証を有効にするには、認証用ミドルウェアを有効にする必要があり ます。 このチュートリアルでは Google Account での認証を使う事とします。

ユーザー認証の設定

まずは settings.py に MIDDLEWARE_CLASSES というタプルを定義し kay.auth.middleware.AuthenticationMiddleware を設定します。

```
MIDDLEWARE_CLASSES = (
    'kay.auth.middleware.AuthenticationMiddleware',
```

)

ミドルウェア設定の最後にコンマが必要な事に気を付けてください。python では要素が一つだけのタプルを定義する時には明示的なコンマが必要です。

このままでも認証自体は動くのですが、さらにユーザー情報を入れるモデルを自分で定義する事をお勧めします。後でユーザーに紐付く情報を殖やしたくなった時など、独自のモデルを定義しておいた方が何かと楽です。

Google Account での認証を行う場合は `kay.auth.models.GoogleUser` を継承したモデルを定義し、そのモデル名を `settings.py` の `AUTH_USER_MODEL` に記載します(文字列で構いません)。

`myapp.models:`

```
from google.appengine.ext import db
from kay.auth.models import GoogleUser

class MyUser(GoogleUser):
    pass
```

`settings.py`

```
AUTH_USER_MODEL = 'myapp.models.MyUser'
```

ここでは、モデルにはまだ独自プロパティを定義していませんが、将来のため に始めから独自モデルにしておく事をお勧めします。

使用方法

`request.user`

認証用ミドルウェアを有効にすると `request.user` が設定されます。ユーザーがログインしていればユーザーエンティティ、そうでなければ `kay.auth.models.AnonymousUser` というクラスのインスタンスが入っています。

これらのクラスに共通して使用できるアトリビュートとメソッドを示します。

- `is_admin`
このアトリビュートは、そのユーザーが管理者かどうかを表す真偽値です。
- `is_anonymous()`
このメソッドはユーザーがログインしていれば `False` をログインしてなければ `True` を返します。
- `is_authenticated()`
ログインしていれば `True`, そうでなければ `False` を返します。

template 内での使用例

下記のような断片を `myapp/templates/index.html` に入れてみましょう。

```
<div id="greeting">
  {% if request.user.is_anonymous() %}
    <a href="{{ create_login_url() }}">login</a>
  {% else %}
    Hello {{ request.user }}! <a href="{{ create_logout_url() }}">logout</a>
  {% endif %}
```

```
</div>
```

このコードは、ユーザーがログインしていなければログイン画面へのリンクを表示し、ログインしていればログアウトするためのリンクを表示します。

デコレーター

認証しないとアクセスできないページを簡単に作るには、デコレーターを使います。ログインしないとアクセスできないようにするには `kay.auth.decorators.login_required` で、管理者アカウントにてログインが必要なページを作成するには、`kay.auth.decorators.admin_required` で view 関数を修飾します。

例:

```
from kay.utils import render_to_response
from kay.auth.decorators import login_required

# Create your views here.

@login_required
def index(request):
    return render_to_response('myapp/index.html', {'message': 'Hello'})
```

`index` へのアクセス時にログインが必要になっている事を確認してみましょう。

ゲストブックの実装 - Step 1

このチュートリアルでは簡単なゲストブックを作成します。その過程で、Kay の機能をできるだけ紹介していく予定です。

まずはモデルとフォームの基本的な使い方についてご紹介します。

モデル定義

Kay でのモデル定義には基本的に `appengine` の `db` モジュールをそのまま使います。 `kay.db` パッケージ内に少しか Kay 独自のプロパティがあります。

ここではゲストブック用のモデルを定義してみましょう。

`myapp/models.py`:

```
from google.appengine.ext import db
from kay.auth.models import GoogleUser
import kay.db

# ...

class Comment(db.Model):
    user = kay.db.OwnerProperty()
    body = db.TextProperty(required=True)
    created = db.DateTimeProperty(auto_now_add=True)
```

`user` に割り当てた `kay.db.OwnerProperty` は Kay 独自のプロパティで、現在ログイン中であるユーザーの `key` を自動で格納するためのプロパティです。

`body` にはコメント本体を保存します。また `created` には作成日時が自動で入ります。

werkzeug.redirect, kay.utils.url_for と先程作成したモデル・フォームを import しています。index ビューの内部ではフォームを作成し、http メソッドが POST の時にはフォームのバリデーションを行っています。

フォームのバリデーションに成功した場合には Comment オブジェクトを作成した後に、トップページへリダイレクトしています。

url_for というのは URL 逆引きのための関数で、引数で与えられた endpoint に対応する URL を返します。ここでデフォルトの urls.py を思い返してみましょう。

```
view_groups = [
    ViewGroup(
        Rule('/', endpoint='index', view='myapp.views.index'),
    )
]
```

urls.py では endpoint として 'index' を指定していました。ですが逆引きの時には 'myapp/index' を使用しています。実は Kay ではアプリケーション間で endpoint が衝突する事を防ぐために、自動でアプリケーション名を前置します。

ですので、逆引きを行う時には urls.py で設定した endpoint そのままでは無く app_name/endpoint という形で endpoint を指定する必要があります。

テンプレート

```
<!DOCTYPE HTML PUBLIC "-//W3C//DTD HTML 4.01 Transitional//EN" "http://www.w3.org/TR/html4/loose.dtd">
<html>
<head>
<meta http-equiv="Content-Type" content="text/html; charset=UTF-8">
<title>Top Page - myapp</title>
</head>
<body>
<div id="greeting">
    {% if request.user.is_anonymous() %}
        <a href="{{ create_login_url() }}">login</a>
    {% else %}
        Hello {{ request.user }}! <a href="{{ create_logout_url() }}">logout</a>
    {% endif %}
</div>

<div id="main_form">
    {{ form()|safe }}
</div>
</body>
</html>
```

ここまでで、フォームから投稿したコメントを datastore に保存できるようになりました。

開発用サーバーでデータが保存できるか試してみましょう。いくつかコメントを投稿した後に http://localhost:8080/_ah/admin へアクセスすると、データストアの中身を見る事ができます。

kind が myapp_comment というのが今回作成したコメントのエンティティです。kind にもアプリケーション名が前置されている事がわかります。デフォルトでは Kay はクラス名にアプリケーション名を前置して、さらに lowercase したものを kind として使用します。この挙動を抑制するには settings.py にて ADD_APP_PREFIX_TO_KIND を False に設定します。

ゲストブックの実装 - Step 2

現在の実装だと投稿しても表示されないなので実感がわきません。そこで最新20件のコメントを表示するようにしてみましょう。

クエリーを使用する

myapp/views.py:

```
ITEMS_PER_PAGE = 20

# Create your views here.

@login_required
def index(request):
    form = CommentForm()
    if request.method == "POST" and form.validate(request.form):
        comment = Comment(body=form['body'])
        comment.put()
        return redirect(url_for('myapp/index'))
    query = Comment.all().order('-created')
    comments = query.fetch(ITEMS_PER_PAGE)
    return render_to_response('myapp/index.html',
                              {'form': form.as_widget(),
                               'comments': comments})
```

このコードでは、テンプレートに対して、最新20件のコメントを渡しています。

テンプレート内でのループ

テンプレートで受け取ったコメントを表示しましょう。

myapp/templates/index.html:

```
{% if comments %}
<div id="comment_list">
  <ul>
    {% for comment in comments %}
      <li>{{ comment.body }}
        <span class="author"> by {{ comment.user }}</span>
    {% endfor %}
  </ul>
</div>
{% endif %}
```

フォームを表示している部分の下に上記コードを追加しましょう。これで最新 20件のコメントが表示されるようになりました。

ゲストブックの実装 - Step 3

コメント投稿時に予め設定してあるカテゴリーを選べるようにしましょう。

モデルフォーム

まずはカテゴリーを保存するモデルを作り Comment クラスにもプロパティ を追加しましょう。

myapp/models.py:

```
class Category(db.Model):
    name = db.StringProperty(required=True)
```

```
def __unicode__(self):
    return self.name

class Comment(db.Model):
    user = kay.db.OwnerProperty()
    category = db.ReferenceProperty(Category)
    body = db.StringProperty(required=True, verbose_name=u'Your Comment')
    created = db.DateTimeProperty(auto_now_add=True)
```

次にフォームですが、プロパティが増える度にフォームの実装も変更しなければならぬのは面倒なので、モデルからフォームを自動生成できる仕組みを使いましょう。

モデルからフォームを自動生成するには `kay.utils.forms.modelform.ModelForm` クラスを継承したフォームを作成します。

```
# -*- coding: utf-8 -*-

from kay.utils import forms
from kay.utils.forms.modelform import ModelForm

from myapp.models import Comment

class CommentForm(ModelForm):
    class Meta:
        model = Comment
        exclude = ('user', 'created')
```

`ModelForm` の使いかたはまず `ModelForm` を継承したクラスを作成します。次にその中に内部クラス `Meta` を定義する事で設定を行います。 `Meta` 内で有効な attribute は下記の通りです。

- `model`
フォーム生成の元にするモデルクラスを指定します。
- `exclude`
モデルクラスに定義されているプロパティの中で、フォームに表示しないものをタプルで指定します。次の `fields` とは排他的で、どちらか一方しか設定できません。
- `fields`
モデルクラスに定義されているプロパティの中で、フォームに表示するものをタプルで指定します。`fields` に定義されていないプロパティは表示されません。上記の `exclude` とは排他的で、どちらか一方しか設定できません。
- `help_texts`
フォームフィールドにヘルプ文字列を与える時に使用します。フィールドの名前をキーにした辞書として設定します。

管理用スクリプト

この段階で、カテゴリーを選ぶフォームはできているのですが、まだカテゴリーがありませんので、セレクトボックスには選択肢がありません。これは少し寂しいので、カテゴリーを追加しましょう。ここでは、カスタムの管理用スクリプトを追加してカテゴリーを追加できるようにしてみます。

`myapp/management.py` というファイルを下記の内容で作成しましょう。

```
# -*- coding: utf-8 -*-

from google.appengine.ext import db

from kay.management.utils import (
    print_status, create_db_manage_script
)
from myapp.models import Category

categories = [
    u'Programming',
    u'Testing',
    u'Management',
]

def create_categories():
    entities = []
    for name in categories:
        entities.append(Category(name=name))
    db.put(entities)
    print_status("Categories are created successfully.")

def delete_categories():
    db.delete(Category.all().fetch(100))
    print_status("Categories are deleted successfully.")

action_create_categories = create_db_manage_script(
    main_func=create_categories, clean_func=delete_categories,
    description="Create 'Category' entities")
```

うまくできると、python manage.py の出力に下記のエントリが追加されます:

```
create_categories:
  Create 'Category' entities

-a, --appid                string
-h, --host                 string
-p, --path                 string
--no-secure
-c, --clean
```

下記のようにして Category のエンティティを三つ追加できます。

- GAE にデプロイしたアプリに対して実行するには
\$ python manage.py create_categories
- 起動している開発用サーバーに対して実行するには
\$ python manage.py create_categories -h localhost:8080 --no-secure

Category を追加した後で、アプリケーションにアクセスしてみましょう。 三つの選択肢が選べるようになっていれば成功です。

いくつかコメントをカテゴリを指定して投稿し、データストアビューアーで確認してみましょう。

Note

管理用スクリプトを追加する方法について詳しく知るには [カスタムの管理用スクリプトを書く方法](#) を参考にしてく ださい。

カテゴリーの表示

コメントの一覧にカテゴリーを表示するようにしてみましょう。コメントの一 覧を表示している部分を下記のように変更します。

```
{% if comments %}
<div id="comment_list">
  <ul>
    {% for comment in comments %}
      <li>{{ comment.body }}
        <span class="author"> by {{ comment.user }}</span>
        {% if comment.category %}
          <br>
          <span class="category"> in {{ comment.category.name }}</span>
        {% endif %}
      {% endfor %}
    </ul>
  </div>
{% endif %}
```

CRUDの自動生成

次にこのカテゴリを管理する画面を作成してみます。管理者のみがアクセス可 能な、カテゴリの追加・削除・変更ができる画面を作成します。

まず Category 用のフォームを作成します。

myapp/forms.py:

```
# -*- coding: utf-8 -*-

from kay.utils import forms
from kay.utils.forms.modelform import ModelForm

from myapp.models import (
    Comment, Category
)

class CommentForm(ModelForm):
    class Meta:
        model = Comment
        exclude = ('user', 'created')

class CategoryForm(ModelForm):
    class Meta:
        model = Category
```

Category をインポートし、新たに CategoryForm を定義しています。

次に myapp/urls.py を下記のように変更します。

```
from kay import generics
from kay.routing import (
    ViewGroup, Rule
)

class CategoryCRUDViewGroup(generics.CRUDViewGroup):
    model = 'myapp.models.Category'
    form = 'myapp.forms.CategoryForm'
    authorize = generics.admin_required

view_groups = [
    ViewGroup(
        Rule('/', endpoint='index', view='myapp.views.index'),
    ),
    CategoryCRUDViewGroup(),
]
```

最後に settings.py の MIDDLEWARE_CLASSES に kay.utils.flash.FlashMiddleware を追加します。

```
MIDDLEWARE_CLASSES = (
    'kay.auth.middleware.AuthenticationMiddleware',
    'kay.utils.flash.FlashMiddleware',
)
```

これで <http://localhost:8080/category/list> にアクセスするとカテゴリーの リストが表示されるはずです。追加や編集などを試してみてください。

Note

CRUDの自動生成について、さらに詳しくは [汎用ビューグループ](#) をご覧下さい。

カテゴリー削除時の対処

既に気づいた方もいらっしゃるかも知れませんが、この段階で、コメントが一つ以上属しているカテゴリーを削除すると、コメントの表示時にエラーになってしまいます。

ここでは、カスケードデリートを実装するために db_hook の仕組みを使用 しましょう。

もしエラーになってしまった方は、当該のコメントをデータストアビューアー から消去するか、開発用サーバーを一度止めて python manage.py runserver -c と -c を付けてデータを全削除し、再度カテゴリー・コメント を作成してから進んでください。

まずは settings.py で db_hook の仕組みを有効にします。

```
USE_DB_HOOK = True
```

次に下記のようにして myapp/__init__.py でフック関数を登録します。

myapp/__init__.py:

```
# -*- coding: utf-8 -*-
# Kay application: myapp

from google.appengine.ext import db

from kay.utils.db_hook import register_pre_delete_hook

from myapp.models import (
    Comment, Category
)

def cascade_delete(key):
    entities = Comment.all(keys_only=True).filter('category =', key).fetch(2000)
    db.delete(entities)

register_pre_delete_hook(cascade_delete, Category)
```

ここでは ad-hoc に 2000 件のみ取得して消去していますが、実際にきちんと実装するにはもう少しがんばってください。

この状態でカテゴリーを消去すると、そのカテゴリーに属するコメントもそれに伴って削除されるはずです。

Note

db_hook 機能についてさらに詳しくは [db_hook 機能を使用する](#) をご覧下さい。

ゲストブックの実装 - Step 4

次にアプリケーションを国際化してみましょう。Kay では gettext ベースの国際化機能が備わっています。

国際化を有効にする

まずは settings.py で USE_I18N を True に設定します。

```
USE_I18N = True
```

この段階で、中途半端に国際化されている事と思います。accept_language で 日本語を優先した状態でアクセスすると、トップページの submit が 送信 に変わっている事がわかります。

国際化のためにメッセージをマークする

まずはフォームに表示するフィールドのタイトルをマークします。

myapp/models.py:

```
# -*- coding: utf-8 -*-
# myapp.models

from google.appengine.ext import db
from kay.auth.models import GoogleUser
```

```

import kay.db
from kay.i18n import lazy_gettext as _

# Create your models here.

class MyUser(GoogleUser):
    pass

class Category(db.Model):
    name = db.StringProperty(required=True, verbose_name=_(u'Name'))

    def __unicode__(self):
        return self.name

class Comment(db.Model):
    user = kay.db.OwnerProperty()
    category = db.ReferenceProperty(Category, verbose_name=_(u'Category'))
    body = db.StringProperty(required=True, verbose_name=_(u'Your Comment'))
    created = db.DateTimeProperty(auto_now_add=True)

```

kay.i18n.lazy_gettext を _ として import しています。更にフォームに表示するフィールドには verbose_name という引数を渡すようにして、値を _() の呼び出しで囲んでおきます。

Note

詳しくは説明しませんが、大雑把に言うと models.py や forms.py では lazy_gettext を使用します。views.py の中では gettext を使用します。

次はテンプレート内部の文字列をマークしましょう。ここでは練習のため二つの方法を試します。

myapp/templates/index.html:

```

<div id="greeting">
    {% if request.user.is_anonymous() %}
    <a href="{{ create_login_url() }}">{{ _('login') }}</a>
    {% else %}
    Hello {{ request.user }}! <a href="{{ create_logout_url() }}">
    {% trans %}logout{% endtrans %}
    </a>
    {% endif %}
</div>

```

翻訳を作成する

下記のコマンドでマークした文字列を抽出します。

```

$ python manage.py extract_messages -a
Running on Kay-0.10.0
Extracting from /Users/tmatsuo/work/kay-tutorial/myproject/myapp
myapp/__init__.py
myapp/forms.py
myapp/management.py

```



```
myapp/models.py
myapp/urls.py
myapp/views.py
myapp/templates/index.html
All done.
```

日本語用の po ファイルを作成します。

```
$ python manage.py add_translations -a -l ja
Running on Kay-0.10.0
Creating myapp/i18n/ja/LC_MESSAGES/messages.po.
Cant open file. Skipped myapp/i18n/jsmessages.pot.
Created catalog for ja
Cant open file. Skipped /Users/tmatsuo/work/kay-tutorial/myproject/i18n/messages.pot.
Cant open file. Skipped /Users/tmatsuo/work/kay-tutorial/myproject/i18n/jsmessages.pot.
Created catalog for ja
```

myapp/i18n/ja/LC_MESSAGES/messages.po をエディタで編集します。

```
# Japanese translations for PROJECT.
# Copyright (C) 2010 Takashi Matsuo
# This file is distributed under the same license as the PROJECT project.
# FIRST AUTHOR <EMAIL@ADDRESS>, 2010.
#
msgid ""
msgstr ""
"Project-Id-Version: myproject-0.1\n"
"Report-Msgid-Bugs-To: tmatsuo@candit.jp\n"
"POT-Creation-Date: 2010-05-06 16:39+0900\n"
"PO-Revision-Date: 2010-05-06 16:39+0900\n"
"Last-Translator: FULL NAME <EMAIL@ADDRESS>\n"
"Language-Team: ja <LL@li.org>\n"
"Plural-Forms: nplurals=1; plural=0\n"
"MIME-Version: 1.0\n"
"Content-Type: text/plain; charset=utf-8\n"
"Content-Transfer-Encoding: 8bit\n"
"Generated-By: Babel None\n"

#: myapp/models.py:15
msgid "Name"
msgstr "カテゴリー名"

#: myapp/models.py:22
msgid "Category"
msgstr "カテゴリー"

#: myapp/models.py:23
msgid "Your Comment"
msgstr "コメント"

#: myapp/templates/index.html:11
msgid "login"
msgstr "ログイン"

#: myapp/templates/index.html:14
```

```
msgid "logout"  
msgstr "ログアウト"
```

Note

このファイルは文字コードを UTF-8 で保存してください。

上記のように編集した後に、このファイルをコンパイルします。

```
$ python manage.py compile_translations -a  
Running on Kay-0.10.0  
Compiling myapp/i18n  
Compiling myapp/i18n/ja/LC_MESSAGES/messages.po  
All done.  
i18n folder missing
```

これでアプリケーションにアクセスすれば、翻訳文字列を準備した場所では日本語が表示されているはずです。